



TITLE:

『明代満蒙史料』の刊行をおえて

AUTHOR(S):

田村, 實造

CITATION:

田村, 實造. 『明代満蒙史料』の刊行をおえて. 東洋史研究 1959, 18(2): 197-202

ISSUE DATE:

1959-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148145>

RIGHT:

『明代滿蒙史料』の刊行をおえて

田 村 實 造

昭和二十九年一月以來刊行をつづけてきた明實錄抄・明代滿蒙史料も、本年（三十四年）三月をもつて史料篇十八冊をおえることができ、關係者一同はつとしたところである。あとまだ研究篇一冊を續刊する計畫であるが、ひとまず史料篇を完了したこの機會に、本史料に關する編纂方針や、皇明實錄諸抄本との對校や印刷の校正など刊行上の経過について記述しておくのも、今後この史料を利用してもらううえに參考になることとおもわれるので、ここにあらうて、ふでをとつたしだいである。

中國史を通じてみると、中國とマンチュリア、モンゴリアを中心とする北アジア諸民族ともつともふかい關係があつたのは、漢・唐・明の三代であろう。なかでも明代三百

年間は貿易・朝貢にせよ、あるいは討伐・侵寇にせよ、兩者の關係はいちばんふかかつた。したがつて、これに關する明代の文獻は無數にあるが、政治・社會・經濟・文化・外交・軍事など、あらゆる方面にわたり正確な記事が豊富にもらわれているのは皇明實錄をいってほかにないであろう。ただし皇明實錄は、太祖（洪武）以下熹宗（天啓）にいたる十三朝二千九百十餘卷をかぞえる龐大な記録であるため、これをいちいち詳細に涉獵し檢索することは容易なわざではない。そこで、かつて昭和八年（一九三三）、わが外務省文化事業部は諸學者の意見にしたがい、滿蒙文化研究の一事業として、皇明實錄中から滿洲族・蒙古族に關する記事を抄出することを計畫し、その監修を京都帝國大學教授内藤虎次郎、同羽田亨兩博士に委嘱することになった。

同時に東京帝國大學教授池内宏博士にも、同博士監修のもとに朝鮮の李朝實錄中から滿蒙關係史料を抄録すべく委託したのであつた。

皇明實錄からの抄録事業は、はじめ内藤博士の指導で、當時京都帝國大學文學部史學科をおえて明・清時代の滿洲史を専攻しつつあつた三田村泰助（現、立命館大學教授）今西春秋（現、天理大學教授）の兩學士があつたが、事業開始の翌年内藤博士は不幸にして道山に歸せられたので、その後はもっぱら羽田博士が指導を擔當されることになった。この事業ははなはだ困難な仕事であつて、これにとりくむ三田村・今西兩氏の苦心はひととおりではなかつたが、ついに五カ年の歳月をついやして、明實錄抄・滿蒙史料の稿本ができあがり、その年今西學士は北京に留學することになった。この稿本は、その後も三田村學士によつて、補訂がくわえられ、さらに三田村氏が第二次大戰に應召したのは、内田吟風博士（現、神戸大學教授）と岡崎精郎學士とが一部の校合にあたつた。しかし稿本の出版となると、十五冊にもなんなんとする大冊であるため容易に實現するにいたらなかつた。一時昭和十七年日滿文化協會によつて

刊行が企圖され、第一卷にあたる蒙古篇一の刊行をみたが、わがくにの敗戦によつて續刊ののぞみをたれた。その後十餘年間、かつて三田村・今西兩氏が青春の心血をそいだ稿本も、京都大學東洋史研究室の一隅にむなしくつみかさねられて、ただ一二のひとびとに、ときたま利用されるにすぎず、われわれ關係者としても遺憾にたえないしだいであつた。たまたま昭和二十九年にいたり文部省學術課は本史料の價值をみとめて、その出版を援助することになり、明實錄抄・滿蒙史料は京都大學文學部から、また李朝實錄抄・滿蒙史料は東京大學文學部から、ともに五カ年——のちに一カ年延長して六カ年——繼續事業として刊行されるはこびとなつたが、これはわが東洋史學界にとつても、まことによるこびにたえないことであつた。

さて京都大學文學部における明實錄抄・滿蒙史料の出版にあたつては、筆者（田村）が當面の責任者として三田村教授とともに中心となり、そのうち滿洲篇は間野潜龍、山崎武治兩學士、蒙古篇は萩原淳平、河内良弘、のちに井ノ崎隆興の三學士がそれぞれ擔當協力し、印刷の校正には、東洋史研究室の多數の諸君をわずらわして、昭和二十九年

(一九五四) 一月蒙古篇一、同三月滿洲篇一、同三十年一月蒙古篇二、三月滿洲篇二・蒙古篇三、同三十一年一月滿洲篇三、三月蒙古篇四・滿洲篇四、十月蒙古篇五、十二月滿洲篇五、同三十二年二月滿洲篇六、三月蒙古篇六、十月蒙古篇七、同三十三年一月蒙古篇八、三月蒙古篇九、同三十四年三月蒙古篇十、附西藏史料、滿洲篇項目總索引、おなじく蒙古篇項目總索引の計十八冊の刊行をおえた。このうち蒙古篇十に附載した西藏史料篇は、京都大學助教佐藤長學士の苦心になるもので、これによつて皇明實錄中から滿洲・蒙古のほか西藏に關する史料も、抄録されたわけである。なおこれと並行して着手されてきた東京大學文學部による李朝實錄抄・滿蒙史料も、史料篇十五冊、索引一冊が、おなじく本年三月をもつて出版完了した。

抄録の方針と増補について 當初、内藤・羽田兩博士によつてたてられた一般方針は、編纂の便宜上、滿洲篇と蒙古篇との二篇にわけること、抄出の記事はそれぞれ原本の卷數によつて一括し、實錄に記載された年次にしたがつて排列することであつた。そして抄録の方針としては、滿洲篇においては、その範圍を明代滿洲の地域にかぎり、こ

の地域内にあつて活動したもろもろの民族の事蹟に關する一切の史料——ただし日本民族に關する若干の記事は省略——を抄出することであつた。一方蒙古篇にあつては、皇明實錄の記載そのものが、明朝の内政問題といわず對外政策といわず、その大半が蒙古に關連するものであるため、蒙古に關する記事をとごとく抄出することは、はなはだ困難であり、事實不可能事でもあるところから、その取材の範圍を、いちおう漠北の地にしりぞいたのちの蒙古族の動靜をつたえる一切の記述、および明朝の對蒙古政策に關するものうち重要とおもわれる事項に限定されたのであつた。

ところが、いよいよ稿本を印刷に附することになつてみると、われわれ編者のあいだにもいろいろの問題がおこつてきた。なかでも「明朝の對蒙古政策に關するもののうち重要とおもわれる事項」に對する重要性のおきかたのちがいが、もつともおおきな問題となつた。このちがいは戦前と戦後におけるわが歴史學界の研究上の觀點、とくに經濟的問題、社會的問題に對する觀點の變化にも關連する。すなわち、明代蒙古・滿洲族の社會ならびに習俗、また明朝

の滿洲・蒙古民族に對する政治・經濟・軍事上の諸施設、たとえば、明朝の滿蒙防衛に關し、その北邊防衛軍の配置とか、防衛軍への糧秣補給の手段——開中法（中鹽法）、屯田策、中期以降における銀による現地調達の方法など——に關する記事などは、初稿本では抄録されない方針であつたが、しかし、これらは滿蒙民族はもとより、明朝治下の中國の經濟・社會と密接に關連する重要な問題であることなどにおもひいたると、編者としては當初の抄録方針にもあらためて検討をくわえなければなくなり、その結果既成の初稿本に、さらにおおはばの増補をほどこすことになつたのである。

この増補事業は、ひとくちに増補とはいつても、皇明實錄全卷をあらためて、はじめからよみなおさねばならず、とくに蒙古篇に關しては、けつきよく、ふたたびあらたに抄録をおこなう以上に困難なことであつた。この増補を全面的に擔當したのは、萩原淳平學士と間野潜龍學士とであつた。すなわち、滿洲篇は間野君が擔當して、もつぱら三田村教授とともにその取捨を選択し、蒙古篇は萩原君があつて、その取捨は田村とともにおこなうこととした。こ

うして増補された部分は、全卷を通じて初稿本の約三分の一に達している。つぎにこのあらたに増補することになつた部分を、いちいち實錄の他の諸抄本と對校したのち、それらを稿本のそれぞれの日づけのもとに挿入添付すること、わずらわしさをきわめたが、これには河内良弘（蒙古篇）山崎武治（滿洲篇）井ノ崎隆興（蒙古篇一部）の三學士があたつた。

なお元良哈三衛に關する實錄の記載は、原則上蒙古篇にいたれたが、この民族と滿洲との關係も密接であるので、記事によつては、とくに滿洲篇にもおさめて、双方に重出しものもある。

稿本の對校と印刷の校正について 本史料のよつた底本は京都大學附屬圖書館所藏の鈔本皇明實錄であるが、京都大學本は現に内閣文庫に收藏されている二種の古鈔本明實錄を、彼此つづりあわせて筆寫したものである。そのうち神宗朝のものは、實錄とは別類の記録であり、またつぎの光宗・熹宗の二朝は、まったく實錄を缺如している。そこで京都大學本は、神宗以下は別に舊北京京師圖書館本を鈔寫して、その缺をおぎなつてゐる。

さてわが國には、内閣文庫本のほかに宮内廳書陵部圖書館、國立上野圖書館および東洋文庫にもまた舊鈔皇明實錄が収藏されているが、これらを對校してみると、それぞれたがいに異同出入がある。われわれの利用したのは、これらの實錄のほかに、近時影印されて一般に通行している中國江蘇國學圖書館の傳鈔本（俗に梁氏本という）と、わが國會圖書館の好意によつて本事業の中途からではあるが入手することができた米國議會圖書館収藏の北京京師圖書館本のマイクロフィルム（太祖朝より穆宗朝まで）とであつた。われわれは本史料に抄出した記事につき、いちいちこれらの諸本を參照對校して補訂をくわえたが、いまその要を摘記すると、つぎのようである。

(一) 太祖朝から武宗朝までの記事は、宮内廳圖書館本および梁氏本と對校し、なお疑義のある箇所については東洋文庫本とも對校して若干の補訂をほどこした。なお東洋文庫本との對校にあたつては、同文庫の田川孝三學士をたびたびにわたつてわずらわした。

(二) 京都大學本は世宗・穆宗の兩朝において、記事の錯簡あるいは文字の脱誤などがはなだしいため、國立上

野圖書館本および梁氏本とそれぞれ對校したが、なお不十分であるため米國議會圖書館所藏の舊北京京師圖書館本の書影とも對校して増補訂正をおこなつた。

(三) わが國所傳の舊鈔皇明實錄は、いずれも神宗・光宗・熹宗三朝の實錄を缺如するか、またはきわめて粗策であるか、あるいは國立上野圖書館本のように起居注のような別種の記録をもつて、これにあててゐるかなどしているため、本史料はさぎにのべたように京都大學収藏の舊北京京師圖書館本の鈔寫本を底本とした。ただし舊京師圖書館本は、在來の舊鈔本中もつとも精良なものと稱せられてはいるが、なおわずかながら記事をかいでおり、あるいは誤字脱字も存するため、梁氏本によつて若干の増訂をくわえた。

(四) 各卷とも對校によつて判明した文字の異同・脱誤の補訂などは、その數がおびただしく、いちいち注記しきれないので編者の所見にしたがつて訂正をほどこすこととした。本文中誤字脱字とおもわれる部分もすくないが、諸本を通じておなじものは、訂正をほどこさないで、もとのままにとどめた。なお人名・地名の

うちで、うたがわしく取捨にまよつた文字は、當該文字のみに一段ちいさく並記しておいた。

つぎに印刷の校正については、本史料の性質上、細心の注意をはらい、五度六度と校正をかさねる煩もいとわなかつた。そして、なるべくおおくのひとの眼をとすたてまえから、京都大學東洋史研究室の多數の同學諸君の援助をうけたが、わけても岩見宏學士（神戸大學助教）には後半の數冊を通じて校正をわずらわした。（一九五九、八、一〇）

明實錄抄・明代滿蒙史料各卷目次

滿洲篇一 太祖實錄（洪武二―同三一）

太宗實錄（洪武三五―永樂二二）

仁宗實錄（永樂二二―洪熙元）

宣宗實錄（洪熙元―宣德九） 英宗實錄（宣德十）

滿洲篇二 英宗實錄（正統元―天順八）

憲宗實錄（天順八―成化二三）

滿洲篇三 孝宗實錄（成化二三―弘治一八）

武宗實錄（弘治一八―正德一六）

世宗實錄（正德一六―嘉靖四五）

穆宗實錄（隆慶元―同六）

神宗實錄（隆慶六―萬曆六）

滿洲篇四 神宗實錄（萬曆七―同四七）

滿洲篇五 神宗實錄（萬曆四七―同四八）

光宗實錄（泰昌元） 熹宗實錄（泰昌元―天啓二）

滿洲篇六 熹宗實錄（天啓二―同七）

項目總索引

蒙古篇一 太祖實錄（洪武元―同三一）

太宗實錄（洪武三五―永樂二二）

蒙古篇二 仁宗實錄（永樂二二―洪熙元）

宣宗實錄（洪熙元―宣德九）

蒙古篇三 英宗實錄（宣德十―正統六）

蒙古篇四 英宗實錄（正統七―天順八）

蒙古篇五 憲宗實錄（天順八―成化二三）

孝宗實錄（成化二三―弘治九）

蒙古篇六 孝宗實錄（弘治十―弘治一八）

武宗實錄（弘治一八―正德一六）

蒙古篇七 世宗實錄（正德一六―嘉靖九）

蒙古篇八 世宗實錄（嘉靖十―同三十）

蒙古篇九 世宗實錄（嘉靖三一―同四五）

蒙古篇十 穆宗實錄（嘉靖四五―隆慶四）

蒙古篇十一 穆宗實錄（隆慶五―同六）

蒙古篇十二 神宗實錄（隆慶六―萬曆一七）

蒙古篇十三 神宗實錄（萬曆一八―同四二）

蒙古篇十四 神宗實錄（萬曆四三―同四七）

光宗實錄（泰昌元） 熹宗實錄（泰昌元―天啓七）

附、西藏史料 太祖實錄―熹宗實錄

蒙古篇 項目總索引

name of Yao Kuang-hsiao. But it is said he still continued to live the rigorous religious life. The author deals in this article with his activities as a monk, his works on Buddhism, especially on the doctrine of the Ching-t'u 淨土 sect, and his "Tao-yü-lu" 道餘錄 written against Confucian attacks on Buddhism. Finally, the author tries to make clear his part in Buddhist affairs under the early Ming dynasty.

**In memory of the publishment of the "Historical Materials
Concerning Manchulia and Mongolia Under the
Ming Dynasty" 明代滿蒙史料**

Jitsuzô Tamura

The above mentioned books, which had been issued since 1954 by the Oriental History Laboratory, Faculty of Letters, Kyoto University, were completed in eighteen volumes, including all the materials, the last volume being reserved for subsequent research. The author records here the process of the direction of editing, the criticism of some kinds of texts of "Huang-Ming-Shih-Lu" 皇明實錄 from which these materials were extracted, the effort of the proofreading, and so on.